

「環境の世紀 XI」第 1 講

「環境『問題』の問題性・問題点」

廣野 喜幸 (HIRONO, Yoshiyuki) 先生

2004 年 4 月 14 日

こんにちは。廣野です。ここでは、環境問題のイントロダクションであるとともに、大学で学ぶとはどういうことかということも紹介していきたいと思います。

私の学生へのメッセージは、「クリティーク（批判・吟味）という知的作業ができるようになってほしい」ということです。私も含め、教師を鵜呑みにし、受け売りすることは、クリティークからは程遠いあり方です。また、自己のあり方もそうしたクリティークのまなざしを向けてほしい。つまりは、カフカの言葉にあります。が、「きみと世界が対立したときは、世界を支援せよ」ということです。

これがどういうことかということと、そして環境問題についてこれがいかに重要かということをお話していきたいと思います。

1 エコブームと環境問題

コンセプトとして用意したのは「エコブームを問い直す」ということですが、それでも、「エコ」をキーワードに、インターネットで検索してみるとたくさん出てきます。エコキッズ、エコ探検隊、エコ学科、エコケミストリー、エコバンク、エコプロダクツ・・・、実に多種多様なものが検索結果にあがってきます。

戦後どういう現象が起こったかということ、「文化ブーム」の時代が来ました。なんでも「文化」ということばがつかまりました。文化が「キャッチー」な言葉でした。文化包丁、文化なべなども、それに近いですね。今のエコブームも、こういったたぐいの物のように思えます。

公害問題から環境問題に移るときに、私は環境問題に興味をもって環境問題をやり始めましたが、そのころは、環境を守らなければならない、と言うと、「なんで？」となるものでした。開発したっていいじゃないか、そのほうが経済発展するじゃないか、というんですね。そのころは、そもそも「なぜ環境を守らなければならないか」という話をまずしなければなりません。

ですが、最近は環境を守ることが共通事項となって、われわれが説明する手間は省けるようになりました。これは、ブームの功績です。

では、エコブームエコブームといって、地球温暖化問題、フロン・オゾン層問題、酸性雨問題、生物多様性の減少、あるいは、環境ホルモン・ダイオキシンの問題、化学物質の問題、これら諸問題がどのくらい解決しているのでしょうか。

エコブームは、今われわれが求められている環境問題の解決にどの程度貢献しているだろうか、というとはなはだ問題があるような気がします。しかし、悲愴的だからといってけなすだけで、悲観的に見るのはもったいない。ブームなんだから、つまりは世間が認知しているのですから、これを利用しない手はありません。し

かしながら、環境問題について皆さんに言っておきたいことがひとつあります。それは、環境問題はブームで解決するようなやわな問題ではない、ということです。

今日は、環境問題がなぜ難しいかということと、何が問題になってるかということをお話して、エコブームを利用するに当たって、皆さん自身が何ができるかという観点から皆さんに考えてもらうようにしてみたいと思います。

さん自身にできることはなにか、ということで、授業の後のゼミの話題にしたいのは身近な問題で「割り箸」についてです。環境推進派の人の中には、常に自分の「マイ箸」を携帯して繰り返し使っていて、割り箸を人々が使わなくなれば木材の減少が防げると考えている人がいます。実際はそれほど単純な話ではないのですけれどもね。ところが、環境問題の専門家の中には割り箸推進派の方も結構いらっしゃいます。割り箸をやめてマイ箸の推進をしたところで環境問題は全く解決しないという、強力な意見を持った人もいます。今日は、それをネタに、ゼミをしたいと思います。

議論は自分のイタイコトをただ言うか黙ってるかどっちかになりがちですが、議論というのは自分の認識を深めるためにやるのですから、感情的にならずに他人の意見をいかに吸収するかが大事になってくるんですよ。慣れていない人は、自分の意見を否定されたら自分自身を否定されたように感じるんですね。そうじゃないんですよ。批判に慣れなければいけない。議論に慣れなければいけない。そのイントロでは環境三四郎に話をしてもらいます。

ところで、私は今、環境教育を研究してまして、東大における環境教育はどうなっているかということ調べているんですけども、正直言って悲惨な状況です。

新領域研究科に環境研究の部署があります。そこが確実に環境問題をやっています。私の進学した時代、農学部は悲惨なものでしたが、しかしバイオの時代になってできた化学生命学部も頑張っています。今は、農学部は基本的に「環境学部」。環境の授業が一番充実しているのが農学部、次は工学部、という具合です。大学院でもっとも充実しているのは柏の新領域、となっています。

2 動物には権利があるか

今、生物多様性減少問題や動物の権利論があるんですが、これは環境倫理と生命倫理の接点と考えると差し支えありません。つまり、生き物をどう扱うか、ということです。

絶滅寸前の天然記念物アホウドリを漂流した人間は殺して食べていいのか？という問題を加藤尚武さんという方が問題提起をしてらっしゃいますけれども、そういうことを研究する動物権利学という分野があります。

では今、動物を虐待するとどうなるのでしょうか。日本の法律では、動物を虐待すると、その動物に飼い主がいれば、その飼い主の所有権・所有物を侵害したということで、器物損壊罪になります。逆に言えば、野良犬や野良猫を殺したとしても罪になりません。日本は動物の権利を守る法体系になってはいません。動物自体に守るべき権利があるのではなくて、人が持っているから権利があってそれが動物に及んでいるんだという考え方があっていいですね。これは動物に固有の権利を認めない考え方なんです。

環境を守るにも人間が幸せになるために環境を守る。開発したほうが人間の幸せになるのなら開発したほうがいいのだ、という考え方があります。

それから、アマミノクロウサギ訴訟というものがあります。開発したいのだけれども、開発をすると、天然記念物がいなくなる。だから裁判を起こす。しかし、裁判は原告の当事者適格というのがあって、利害関係者でないと裁判を起こせない。アメリカでは、ストーンという人が、その亡くってしまう動物の代わりに人が

代理で裁判を起こすことが可能であるという法理論を作ったんです。ストーンの木の当事者適格という議論があるんです。日本はそれをまねてやろうとしたんですが、結局、象徴的にやっただけで、実際、裁判所に出す書類にはアマミノクロウサギは載らなかったんです。

そういう動物の固有の権利を認める人から見ると、人間が幸福になる場合のみ環境を守ろうという人を浅い考えの持ち主だといって、シャロー・エコロジストと呼ぶんです。

それとは逆に、動物や生態系には固有の権利があり、人間が幸せになるうがなるまいが、生態系は守られてしかるべきという考え方を持った人を、ディープ・エコロジストといいます。ネスという人がこの思想を提唱したんです。

3 環境問題解決の難しさ

3.1 解決困難な「問題」

「問題」ということばを広辞苑で引いてみましょう。次のように掲載されています。

1. 問いかけて答えをさせる題。解答を要する問。「試験 - 」2. 研究・議論して解決すべき事柄。「公害 - 」3. 論争の材料となる事件。「また金銭のことで - を起こした」4. 人々の注目を集めている（集めてしかるべき）こと。「これが - の文章だ」（『広辞苑第5版』岩波書店）

これによれば、環境問題の問題性というのは捉えられないですね。別の辞書を引いてみることにして、独日大辞典 "Groses Deutsch-Japanisch Wörterbuch" というものがありますが、この辞書によれば、「解決すべき困難な問題・課題」とあります。「～の問題」、「～の問題」という言い方があります。昔なら「公害問題」、今なら「環境問題」、あるいは「老人問題」、「いじめの問題」、「外国人労働者受け入れ問題」、「ごみ処理問題」等々。もちろん、その事柄が社会的に重要であり、ことさらに問題視する必要があるからこそ、それらについて「～問題」、「～の問題」という言い方がされるわけです。

しかし一方、「『～問題』、『～の問題』と言ったり聞いたりする時、我々はその問題が簡単には解決しないことも承知している」と、茨城大学の哲学の木村競先生が書いています。木村さん自身としましては「死の演習」という生命倫理の本がありまして、死について日本で先鋭な思考をしていらっしゃいます。そして、今引用したのは森岡さんの「脳死の人」という脳死臓器問題で一世を風靡した本が文庫化されるに当たって、木村さんが書いた解説文です。

問題が問題である以上解決困難であるということを日本人はあまりわかっていません。木村さんの言う問題があらわになっているのが環境問題です。東京農大が ISO を取った、早稲田慶応がエコキャンパスになった、というのを聞いて、環境問題が少しでも解決しているような錯覚に陥りがちですけれども、エコブームがちょっと起こったくらいで環境問題は解決するようなやわな問題ではありません。

では、なぜやわな問題ではないのでしょうか。先ほどの本の続きを読みますと、「それらは解決がすぐに見つかるような単純な問題ではないのだ。様々なレベルの様々な要素が複雑に絡み合って成立していて、論じ始めれば次々と新たな問題が湧き出てくる、そのような事柄について我々は『～問題』という言い方をするのである」とあります。

同じような視点から書いたのがかつて東大の生産研究所にいらっしゃって、今は国連大学にいらっしゃる安井至先生です。安井先生の本に「市民のための環境学入門」（丸善ライブラリー）というのがあります。これも同じような視点で書かれています。安井先生は江戸っ子なのでご当人の話はあまりには歯切れがいいから、何だ全部環境問題は解決するんじゃないかっていう錯覚に陥りますけれどね。

3.2 環境問題の多様な側面

さて、ではなぜ環境問題の解決はそれほどに難しいのでしょうか。公害問題から地球環境問題に変わりました。その違いは、公害問題は基本的にローカル。環境問題は地球レベル。それだけ今、ネーションステート体制ですから、国の利害が絡んでしまって、地球温暖化問題で二酸化炭素をどう減らすかに端的に現れているように、解決が難しくなっているのです。

ただそれだけではなくて、公害問題・水俣病問題は水俣病になった人が確実に被害者として目に見えています。では、ダイオキシン・環境ホルモン問題を考えて見ましょう。環境ホルモンに暴露されるとどういうことが起こるかを考えて見ましょう。

男性だったら精子の寄生率が上がる。女性だったら子宮内膜症の発生率が上がり、出生率が下がる。そういう問題ですので、見ただけではわからないのです。環境ホルモンはものすごく微量で効くので、何が問題かという、環境ホルモンを今の科学技術で検出できない場合が多い、ということなのです。だから、今、我々の周りに「どれくらいのダイオキシンがあるか」ということから侃々諤々の議論をしています。

もし、今ダイオキシンがあるとしましょう。ダイオキシンは半数致死率ではサリンの1000倍の毒性があるんです。半数致死量を算出してそれを毒性としてはかると、ダイオキシンは猛毒ということになります。しかし、動物がサルになると死にません。サルが人間と近いと考えると、人間に対する影響は小さいのかもしれない、ということになります。

今の環境問題とは、現に物資があるかわからない。

仮にその物質があっても、害があるかわからない。

子供が減ったとしてもそれがどうなってるのか分からない。

地球温暖化問題にしても、今、気温が50年で1.5程度上がっている。ところが、この気温の上昇を地球温暖化とみるかどうかで意見の相違がだいぶあります。それは何故でしょうか。

地球の気候は長期的に見て変動します。たとえば、恐竜が生きていた時代は、今より気温が10くらい高かったのですよ。それで、隕石が衝突して、その破片が地球の周りを回って太陽光を遮ったことにより、今より10度ほど気温の高かったところで適応していた生物が、温度の急速な変化に耐えられなくなって絶滅した、というのが重要な説です。

もしかすると現代も10くらい大きな変化の中にあるのかもしれない。地球温暖化問題とされているように、このように地球の平均気温は大きく変化をしていますが、これはたまたま自然の現象の中に我々がいるだけなのかもしれません。それが本当に環境問題なのか、ということになります。この温度上昇は地球の自然なリズムにあって温度変化の中で生物は死んでいくんですけども、それは自然の出来事であって阻止すべきではないという観点もあります。

また、地球環境問題についてはこういう意見もあります。槌田敦という有名な物理学者の意見です。この方は環境問題が盛んになったときにできたエントロピー学会の生みの親の一人です。彼の書いた「資源物理学」という本はあの時代一世を風靡しました。槌田先生はその後、環境保護運動はどこが間違っているのかということで、温暖化は地球環境問題ではない。ただ自然の現象の一部だ。たとえ地球が温暖化しても、温暖化して何が問題なのか。南極の氷が溶ければ、海面のレベルが上がる。世界の都市の大半は海岸沿いにありますから、世界中の大部分の都市が水没する。それが地球環境問題の概念のひとつですよ。そこで彼が地球温暖化をシミュレーションしてみると、南極の氷はほとんど溶け出さない。だから、今くらい気温が上がっても都市は水没しないんだ、というデータを出してきてるんですよ。

東大の中にも地球温暖化問題なんてないっていう授業やっている先生もいらっしたんですよ。彼は地球環境問題はでっちあげだという意見の持ち主で、私が授業の環境倫理で温暖化問題を取り上げると攻撃してきます。

それから、米本昌平さんという方がいます。京都大学理学部を出て独学で科学史の勉強をして、という方の専門家として学問分野で認められて、三菱化成の生命科学研究所の社会生命科学研究所という、今でいう生命倫理を研究するところに就職なさって、その後、地球文明研究所というところができて、そちらに就職なさった方です。米本昌平さんは先鋭な論者ですけれども、この世代は団塊の世代だから政治的なんですね。なんで地球温暖化問題がもてはやされるようになったか、というと、彼が言うには、簡単にいえばベルリンの壁の崩壊にあるんですね。

今、科学研究費がいくらかご存知ですか？今のアメリカの科学研究費の大半は軍事費です。次に原子力開発費、宇宙開発費になります。では、なんで科学研究に多額の金を費やすことをアメリカ国民は許したのでしょうか。それは、ソ連には負けられないとして、ソ連と軍拡競争をやっていたからです。

ところが、90年にベルリンの壁が崩壊して、冷戦が終結しました。そうすると大量の科学研究費を軍事費に回す理由がなくなりました。つまり、科学研究費と軍事研究費が浮いたんですね。そこで何が起こったかという、リベラル派は福祉に回せといった。では、その浮いたお金を福祉に回せばどうなるか、というと、科学者は職を失うんですね。

第一次世界大戦のあとには何が起こったかを考えてみましょう。第二次世界大戦は原爆の戦争、第一次世界大戦は化学戦争。毒ガス兵器は第一次世界大戦のときに科学者が開発したんですね。第一次世界大戦のときに、アメリカやドイツはじめ科学者の就職口がたくさんできました。それで科学者は暮らしていけるようになった。で、第一次世界大戦が終わったときに同じ議論が起こったのです。毒ガス研究費等を転換しようとした。そのときに、フリッツ・ハーバーという、アンモニアの精製法で有名なハーバー法を考案した人ですが、この人が、次々新しく冷戦をあおって、軍事研究がいかに重要か、科学者は研究し続けなければならないということを説いてまわって成功したんですね。それで化学者は就職口を失わなくてすんだんです。

それと同じで、どうして地球環境問題が出てきたか、というと、実は科学者は本気で信じてなくて、だぶついた金を吸収するのにもってこいなのが環境問題だ、今の研究体制を続けるためにだぶついた金の吸収先として地球環境問題がある、というのが米本さんの地球環境問題論です。だから、地球環境問題はないんだというのが米本さんの意見です。

だいたい、何をやるかという、超伝導って覚えています？低温で超伝導がおこります。常温で核融合ができるという話もあったでしょう。核融合は夢のエネルギーですから、もし成功すればエネルギー問題の大半は解決してしまいます。では、何が問題かという、プラズマでの閉じこめがうまくいっていません。核融合というのは言ってみれば小さな太陽を地球上に作るということなんです。しかし、そのままにしておいたら周囲がだめになってしまいますので、それを閉じ込めるんですが、高温になりますから、普通のものでは閉じ込められません。そこで、プラズマを使用するんです。しかし、延々半世紀、核融合はできずにいます。

そうすると、いま言ったように、地球温暖化問題はそもそも温暖化しているのかというレベルで学者たちの議論が絶えません。常温で核融合できる説が出ましたが、他の先生方が追試した結果否定されました。自然科学の研究っていうのは、最初説が出て、それを他の四、五人の先生方が追試して同じ結果が得られてようやく定説となるんです。

3.3 環境問題に対してどう対処するか

そうすると、地球温暖化問題はどのようにして地球が温暖化しているのかということ、どれが自然の気候変動で、どれが人為的な二酸化炭素排出による影響か、数学的なモデルでシミュレーションするんですが、その結果がまちまち。よって、ふつうの自然科学の研究なら「わからない」が科学的結論になるのです。だから、今までの普通の科学研究のレベルでは、地球温暖化に関して学者の間で今現在同意が取れていません。しかし、IPCC という機関がそれまでの科学のあり方を乗り越えて、予防原則、というものを打ち出したんですが、それは、危ないことがあったら前もって対処しておこう、というものなんです。6月2日に村上陽一郎先生が来て予防原則の話詳しく話してくださいませ。

村上陽一郎先生のおすすめの本の紹介に、どうしてリン・ホワイト・ジュニアの「機械と神」っていうのを出しているのかということ、リン・ホワイト・ジュニアは動物の権利を認めない世界の風潮はキリスト教が原因だと言ったんです。キリスト教には(?)という考え方があるんです。神はまず人間を作った、そして人間が生きていくために動植物を作ったので、人間は動植物をどのように扱ってもかまわないという話で、それがシャロー・エコロジストの起源であるという議論を展開しました。その後、これは冗談だった、ひとつの試みとしてやったのだ、とトーンダウンさせたんですが、村上先生はもともと最初はプロテスタントの無教会派、今はがちがちのカトリックで、キリストの神様を信じていらっしゃるから、大変衝撃を受けました。先生は神は環境の破壊を促すはずはないという信念を持って今研究をなさっているから、そのような先生です。

予防原則という考え方について、今まで科学者団体はそのような考えをとっていなかったんですが、それをその場限りで取って、可能性が認められるので、その対処をいまやっておこう、ということで政治プログラムに乗った、という経緯があります。

環境問題はない、地球は温暖化していないと強く主張される科学者がいらっしゃいますが、科学者共同体レベルの判断として必ずしもその主張を責めるべきではないということです。

それから、今本当にそこら辺にダイオキシンがあるのか、環境問題があるかで、議論があって統一の見解がありません。そして、環境問題、ダイオキシンがそこにあるとして、それが人間に害があるのかということも、議論があって、統一の見解がありません。さらに進んで、もし地球温暖化があって、どう対処するかということでも意見の対立があります。

レジュメに松岡秀雄先生編の「地球環境の哲人 - 東京大学全学自由ゼミナール講義録」を挙げておきました。今はなくなったんですが、昔、「人ゼミ」というのがあって、環境三四郎の前身のようなゼミもありました。

松岡先生の話はどうかっていいますと、地球環境問題が起こったときに、どうするのか。あつたかくなるのがまずい。太陽から照射されるエネルギーがあるから暖かくなるんだ。だから、どうすればいいか。

ラグランジュ点というのがあるんですが、そこに傘をつくってそれを開閉することで、地球に照射される光の量を変えて、温暖化問題に対処しようという、マクロエンジニアリングというんですが、そのような事業が実際に行われています。環境問題をさらに科学技術を発展させて解決しようという、科学主義技術主義的解決法といえます。この授業でも、工学部の先生方の話がこれからあると思うのですが、そのような話がたくさん出てきます。

そうでなくて、問題は、アメリカレベルでの生活、我々の生活を維持していけば絶対地球全体が暮らしていけることはない。絶対に環境はだめになる。最終的には人間がどんどん倒れていくという状況になる。テクニクに解決するのではなく、今やるべきことは低エネルギーのライフスタイルに変更して、エネルギー

ギー消費量を下げていくというライフスタイル変更派というのもある。どれが一番有効かはこのレベルでも対立があるんです。

4 環境問題に対してどのような態度をとるべきか

このように、環境問題というのはどのレベルにおいてもつかみ所がないわけです。

冒頭の話に戻りますが、私は授業の最初に、「親と教師の言うことは信用するな」ということを必ずいうのですが、つまり私のいうことも信用してもらっちゃ困るんですが、教師というのは自分ができなくとも理想を示すのが教師ですから、私が言っているのは理想なんです。だから、それを信じちゃうと困る。もうひとつ、教師というのはいい加減なところもあって、自分がその場で思いついたことを言って、すぐ忘れてしまうということもあるので信じないほうがいい。

何を言いたかったかという、この授業にはいろいろな人がいらっしゃいます。でも、今言ったように環境問題がとらえにくいのですよ。それが起こっているから大問題があります。さらにそれが害をなすかどうかでも問題があります。

また、シャロー・エコロジストのような考え方で、人間が幸せになりうる限りで環境を守ろう。いやそうじゃない、環境には生存権があって、人間に害があったとしても守らなければならない環境があるというディープ・エコロジストの考え方もあります。実際環境問題があると言っても、技術論という解決策もあればライフスタイル変更という解決策もあります。アプローチについても様々存在します。

昔は開発か環境かで、環境を守ることで一致していた環境問題が、今は立ち現れる状況が論点によって大きく変わってきます。

今、エコブームが起こって、環境問題に対する像、みなしが分裂してきた。だから、これから来る先生方は、自分に映った環境問題像を皆さんにぶつけてきます。つまり、ひとつの先生が行う授業ではないわけで、ひとつの統一的理解は望むべくもありません。そこには当然対立があり、矛盾もあります。そこで皆さんは、我々に矛盾があるとおかしいじゃないか、と攻める一方ですが、特に環境問題に関しては、いろいろな環境問題を取り組んでいる先生が自分に映った環境問題をぶつけてくるだけです。それを、批判的に摂取していくのは皆さん次第です。だから、必要なのはクリティーク。鵜呑みにせずに、自分の頭を使って、相手の言っていることが本当かどうかを試す場ということです。疑問があったらそれをどんどん講師の先生にぶつけてください。

その練習の場として、「マイ箸」を推進するかということを春原さんに話してもらおうと思います。

=====

こんにちは。学部四年生の春原と申します。割り箸の話をしるということなんですが、突然このように言われたので、まとまった話ができないかもしれませんが、その点はご了承ください。

割り箸を使うか、マイ箸を使うかということにつきましては、今、先生がおっしゃったように、ずいぶんつかみ所のない話で、いろんな観点から、いろいろな議論があります。

どういうところで議論があるかというと、たとえば木材資源という観点からの議論がありますし、廃棄物や水汚染という観点からも議論があります。どこを重視するかということによって様々に変わってきます。

さらに、木材資源ということの中でも、マイ箸を使えば木材の使用量が減るので、森を守ることにもなりますし、いや、割り箸は他には使い道のない端材を有効利用しているので、逆に林業の活性化になっていて、割り箸を使わないから林業が廃れていくんだという人もいます。

私は、環境問題に興味があって、大学に入ってからいろいろな先生のいろいろな話を聞いてきたんですが、この通り、自分の中で整理がつかないんですね。

いろんな意見があって、私自身どの意見が正しいのか間違っているのか、どの先生の意見を尊重していけばいいのかが見えてこないですし、これから皆さんが環境問題に興味をもって、大学の授業を受けたり、本を読んで勉強したりする中で、やはり、整理がつかず悩むことになると思うのですが、では、なぜ私は割り箸を使わないでマイ箸を使っているかということをお話したいと思います。

いろいろ難しい問題があるんですが、割り箸ってというのは、今はともあれ、元は木だったわけですよ。割り箸にされたものが、端材だったにしろ、割り箸のために切られた木にしろ、元は一本の木だったんですね。一本の木と今ここに自分の命と比べたときに、どうしても自分の命のほうが大切だということがどうしても分からなかったんです。人間一人と、他の動物とを比べたりしたときに当然のように人間のほうが優先される世の中だと思うんですが、マウスの実験の話がありましたが、どうしてマウスで実験するのかということ、人間で実験してはいけないからですよ。当然の感覚だと思うのですが、論理的になんで人間はだめでマウスは大丈夫で、それってつまり人間のほうがマウスよりも大事だということなの？ということが、どうしてもわからなかったんですね。で、割り箸を考えたときにも、もともとは一本の木であって、一回の食事を取るためだけに使って捨てるということに対して何の疑問も持たずにできてしまうことが、怖いと思ったんです。で、割り箸を使わないと、割り箸を作っている人や箸袋を使っている人が職を失うじゃないか、とマイ箸を使っているとよく言われるんですが、そういうことで人が亡くなったとしても、自分にとっては一本の木とどちらが大切かといわれれば人間だとはいえない。現実問題として、いろいろ問題はあろうし、こんな夢のようなことは言われてられないのですが、少なくとも、自分にご飯を食べるときに、このようなことを考えた上で、割り箸を使うということは考えられないという結論に達したわけです。

=====

春原さんありがとう。

5 環境問題を見直す リスク論

5.1 中西先生による「環境リスク論」について

では、もうひとつの話をしておこうと思うのですが、今ですね、それぞれの環境問題に関して見直しが始まっています。包括的に環境問題の見直しをやったのが、ロンボルグという人です。これは、本当に環境問題が起こっているかということや、地球温暖化問題や、人口問題などを一つ一つ検証しているので、これを読めば環境問題がどのような状況にあるかということが分かると思います。次に、中西準子先生の話を持ってきますが、東京大学の環境安全センターにいらっちゃって、我々が出す化学物質を安全なものに変えるという作業のトップにいらして、その後、横浜国立大学の環境安全センターの所長をお勤めになって最近おやめになりました。東京大学の海洋研の助教授で水産資源の管理をなさっていた松田博之さんとともに、環境リスク論という本を出しました。

中西さんはこの本の中で、次のような議論を行って、非常に多くの賛成意見と批判を浴びました。水俣病を使った計算を行ったんですが、ご存じの通り水俣では水銀を触媒として材料から製品を作っていたんですが、これまでの化学の常識で触媒というものは、自らの形を変えずに反応を促進するのが触媒の常識だったんです。

しかし、ここでは、水銀が有機水銀、つまり、メチル水銀に変わっていたんです。そのままの水銀の形では問題なかったんですが、有機水銀は脳に蓄積して、悲惨な病気を引き起こしました。ここで、日本はこの製品を作り続けるということを選択しましたので、この製造法を変えなくてはならなかった。水銀ではなくて隔膜

法・イオン交換法という違う方法で製品を作るようにしたんです。もともとの水銀触媒法からイオン交換法に変えるのに 600 億ぐらいかかったんです。

中西先生は、その、600 億のお金で、どのくらいの人が救えたかという計算をしました。中西先生の計算によると、一人の知覚障害になるリスクは 32.8 億ですので、20 人程度の知覚障害者を未然に防いだけだから、もっと有効な利用法があったのではないかと。もし、たとえば福祉にお金を回したとしたら 100 人 200 人の命が助かった可能性があったわけで、20 人障害者を減らすのか、100 人 200 人の命を助けるのとどっちがいいか、という議論をしたんです。

5.2 リスクの再分配

ここで、リスク論について語っておかないといけないのは、5 月 19 日に講義をされるハインツェ先生がお勧めの本にしてありますが、ベック・ウルリッヒの「危険社会」という本があります。この本が何で一世を風靡したかという、我々は今、経済的には資本主義、政治的には自由民主主義の下にいますが、その課題は何かというと富の再分配なんです。なぜかという、皆さんが努力して儲ける分にはいいのですが、普通の社会制度というのは放っておくと、生まれた場所による、最初の出発点の違いによるお金の儲けやすさの違いが出てきます。

私が一生懸命働いてそのお金で何をしても問題ないのですが、親が資産家だったという理由でその財産を相続してお金持ちになる人や、貧乏人の下に生まれたために貧乏人のままである、これは公平ではない。だから、累進課税ってのをやって、相続税をたくさんとって、富を再分配しているわけです。しかし、ベックが言ったのは少なくとも先進国においては、富の再分配を行うことで助かる極貧困層は限られている。だから、今はもう富の再分配は問題ではない。問題なのはリスクの再分配である。今後近代社会は富の再分配ではなく、リスクの分配による社会システムに変わっていくだろう、という議論をしたのがこの本です。

中西先生は先ほどの春原さんの意見には反対するものです。木と人間とどっちのいのちが重いかということとはわからない、などという言い方は環境問題にはなりえない。リスクがあるかという定量化できるところでのみ環境問題は成立する、というものです。

環境問題というものは私が言ったように様々で、統一的な政策が取れないのです。だから、どういうことが起こるかという、たとえば、今、自動車事故で 8000 人から 12000 人亡くなっています。警察庁の統計は事故が起こってから 24 時間以内に死亡した人の統計ですので、実際事故が原因でなくなる方の合計はその 1.5 倍で 12000 人から 15000 人くらいです。

また、医療過誤で死ぬ人は、アメリカの学者が日本を研究して、24000 人から 48000 人だろう、医療過誤で死ぬ人は自動車事故で死ぬ人の数倍であると言う状況があります。では我々はこのような状況で生きているんです。環境問題というのはどれが危険か分からない。日本の原子力発電所で死んだ人は JCO の三人だけでしょ。それに数億という金がかけている。しかし、2.4 万人から 4.8 万人の医療過誤にはほとんどお金がかけていない。それではいけない。

ある政治家が声が大きくて一言言うとすべて変わっていくのが日本の政治なんです。政策もですね。自動車事故や医療過誤に対して声を大きくする人はいなくて、原発にはいるんです。さらにその政策の決まり方に関しても合理性が無さすぎます。リスク論はそうではなくて、環境問題に対してすべてのリスクを計算して、最も効果のあるところから対策をしていきましょうというのが中西先生の環境リスク論です。

5.3 絶対に守るべきものは存在しないのか

で、これが非難を浴びたのは、教育学部の教授をやっている金森修先生がぼろくそに批判したのですが、中西先生は自分のどこが批判されているのかが分からなかったとあって、物別れに終わったのです。

中西先生の何が問題かという、それは微妙で言いにくいのですが、宇沢弘文先生がいらっしゃいますよね。『自動車の社会的費用』という本を書いた人ですけれども、経済学部の看板教授で、ノーベル賞の可能性も高いと言われていて無理だったんですけれども、さっきいた(?)交通事故の話があったときに、人が死ぬというのは社会的に負担でしょう。そういうのを外部不経済というのですが、物の売買は政府等が介入せずにマーケットの原理に任せるのが最もよいんです。ところがその過程が進むにつれてマーケット外に利害が及ぶことを外部性を持つという。その中で、いい効果を持つのを外部経済、悪い効果を持つものを外部不経済という。

この外部不経済の分はコストにかからないわけです。そこまでコストに入れるとどうなるのか。原発でも同じような議論がありますよね。政府が介入しているから費用が安くなっていますが、すべてを企業等で行ったとすればコスト高になって書いてあるよりもっとひどいものではないかという議論があります。

交通事故が問題になったときに自動車業界が自動車の社会的費用は6000円ぐらいだというものを出してみなはそれで納得してしまっただけです。どうやって計算したかという、人が死ぬとその方に保証金を払うわけですね。その保証金はその人が稼ぐであろう金額を計算して払うのですが。その保証金の合計を全国民で割るという計算で出したんです。それに対して宇沢先生は人間の命は大切であるので、それを守るために行う道路の整備費などの公共事業の投資金額を計算して、大体200万から300万という費用を出したんです。

この二つは発想法が根本的に違うのはわかりますか?宇沢先生はまず人の命は守られるべきだ。それに対してお金はどれだけ必要かという計算で、一人200万から300万のお金を払うことによって自動車社会は成り立っている。よって自動車の持つ社会的費用は200万から300万のコストを負担しているんだ、という発想です。しかし、自動車業界は違う。

中西先生の議論は自動車業界に近いのですよ。まず守るべきものがあるのではなくて、功利主義の考え方で、ある場合は森林がなくなってもいいんであって、もしなくなったとしたら、そのコストを計算して最も効率のよい方法を選べばいい。中西先生の議論には絶対的に守るべきものがない。カントの言ったところでは、道徳の絶対性がないということで、カントは批判したんです。そういう議論を中西先生がやったので大きな批判を呼びました。

根本的なところは、環境問題はあるかどうか、それが害をもたらしているかどうか、さらにその解決策はどのようなものがあるか、という対立とともに、現在の環境問題は環境リスク論という形で我々の根本的生き方まで問題にし始めています。

守るべきものを想定して、それにどれくらい社会的費用をかけるのかという発想と、功利主義によって、守るべきものは存在しないとして、お金を投入して一番効果の高いものをやればよいということから、温暖化が進んで水没する都市があったとしても、その国はGDPが低いからそのコストは低く、少々なら温暖化が起こってもかまわないという議論に通じるんです。そういう議論を支持するのか、根本的なところで環境哲学が問われている時代になりました。

6 これから「環境学」を志す皆さんへ

私の時代は守れ守れと言ってればよくて、実際に運動するのは難しかったのですが、言うのは簡単な時代でした。しかし、現代は違って、自分が物事に対してクリティカルなことを考えて、それを哲学のレベルまで高めて、自分の中で哲学を持っていないとマイ箸か割り箸かということも言えなくなってきた。ある意味で、大変なのですが、やりがいのある時代で、皆さんが頑張っていて、環境問題解決に有効性のある、実効性のある本当のエコブームを巻き起こすことに、この講義を利用してくださいを祈ります。